

令和7年度 全国学力・学習状況調査結果の概要について

可児市教育委員会

1 調査の概要

(1) 調査の目的

- ・義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
 - ・可児市教育委員会、学校等が全国的な状況との関係において、自らの教育の結果を把握し、その改善を図る。
- *本調査の結果は児童生徒の学力の特定の一部を示すものであり、この結果のみで児童生徒の学力の全体を判断できるものではありません。

(2) 対象学校・児童生徒

可児市内全公立学校 【11小学校（6年生） 5中学校（3年生）】

(3) 調査内容

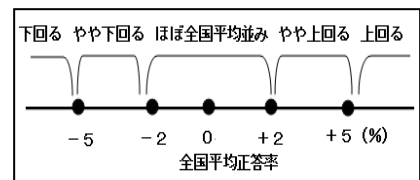
教科に関する調査（国語、算数/数学、理科、生活習慣や学習環境に関する質問調査）

(4) 調査日 令和7年4月14日（月）～17日（木）

2 可児市における調査結果の概要

(1) 教科に関する調査結果

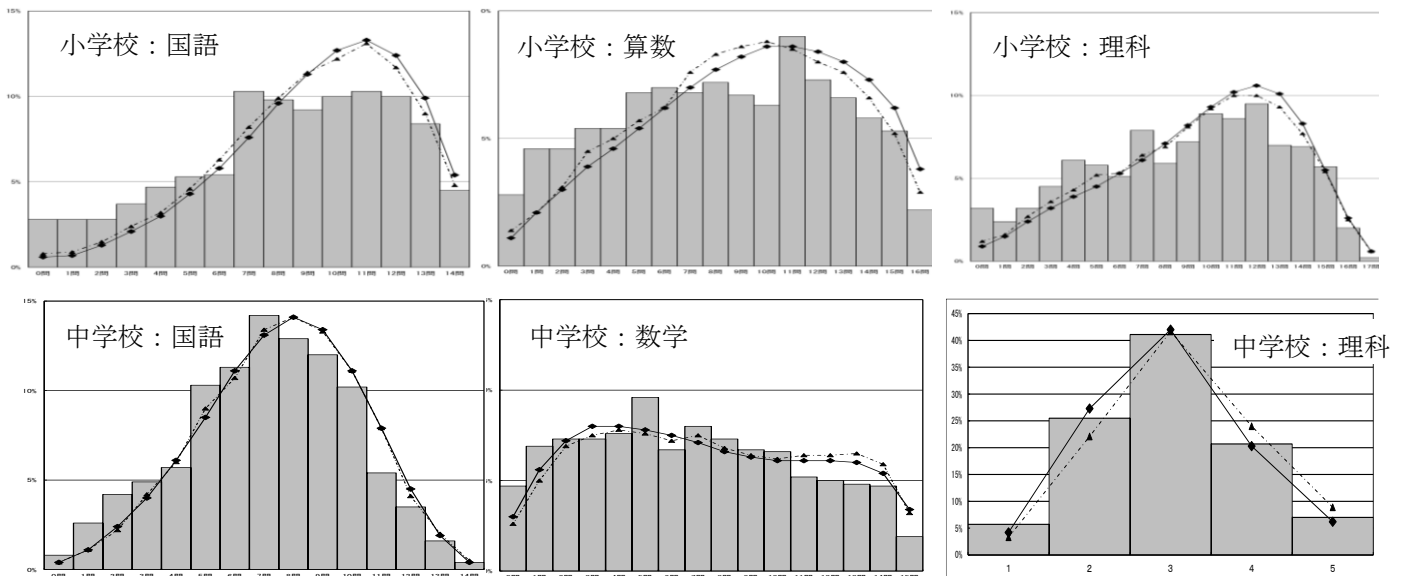
- ・小学校は、国語・算数・理科とも全国平均を下回った。
- ・中学校は、国語・数学は全国平均をやや下回った。
- ・中学校理科は、ほぼ全国平均並みであった。



○正答数分布グラフ

（横軸：正答数 縦軸：割合） ■ 可児市 …▲… 岐阜県 —◆— 全国

※中学校理科は5段階のIRTバンド分布グラフ（横軸：IRTバンド 縦軸：割合）で表示



- ・小学校はどの教科も正答数が少ない児童の割合が高く、正答数が多い児童の割合は低い。
- ・中学校は国語・数学は正答数が少ない生徒の割合が高く、正答数が多い生徒の割合は低い。
- ・中学校の理科の正答数の割合は、全国とほぼ同じである。

○各教科の結果概要からみた特徴

- [小国] 「言葉の特徴や使い方に関する事項」「書くこと」に関わる設問に対する正答率の全国比が低いが、「我が国の言語文化に関する事項」に関わる設問では昨年よりも全国比が高くなり、全体では昨年全国比より0.9上がった。
- [小算] 「変化と関係」に関わる設問に対する正答率の全国比が低いが、全体では昨年全国比より0.4上がった。
- [中国] 記述式の問題のうち1問は、全国比以上であったが、全体の正答率は全国比が下がった。
- [中数] 「数と式」に関わる設問に対する正答率の全国比がやや低いが、「データの活用」に関わる設問では昨年よりも全国比が高くなり、全体では昨年全国比より0.2上がった。

○課題となる特徴的な設問

(「 」内は、設問の概要や出題の趣旨 ()内は、学習指導要領の内容・領域：評価の観点)

[小国] 「学年別漢字配当表に示されている漢字を文の中で正しく使うことができるかどうかをみる」 (言葉の特徴や使い方に関する事項：知識・技能)

「目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりするなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫できるかどうかをみる」 (書くこと：思考・判断・表現)

[小算] 「『10%増量』の意味を解釈し、『増量後の量』が『増量前の量』の何倍になっているかを表すことができるかどうかをみる」 (変化と関係：思考・判断・表現)

[中国] 「書く内容の中心が明確になるように、内容のまとまりを意識して文章の構成や展開を考えることができるかどうかをみる」 (書くこと：思考・判断・表現)

[中数] 「素数の意味を理解しているかどうかをみる」 (数と式：知識・技能)

<課題解決への手立て>

□基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得する

小中学校とも国語では、漢字を正しく使う知識・技能の習得に弱さがみられました。漢字や語句を機械的に書くだけでなく、その意味を理解し、学習の感想や振り返りを書いたり、日記や作文を書いたりする機会を意図的に増やし、基礎的・基本的な知識及び技能の定着を図ります。

□仲間と考えを交流することで理解の充実を図る

小学校算数では、「10%増量」の捉え方に課題がみられました。求め方の理解に加え、求めた値が妥当であるかを仲間と交流することで理解が深まると考えます。中学校数学では「素数に1を含める」誤答が多くありました。素数の定義を暗記するだけでなく、例えば「1が素数に含まれることで、どのような不都合が生じるか」を考え仲間と交流することで、確かな理解へつながると考えます。このように仲間と考えを交流する学びを意図的に位置づけることで、学習内容の理解の充実を図ります。

(2) 児童生徒質問に関する調査結果

①規則正しい生活習慣を身に付けている児童生徒が多い

質問内容	小学校	中学校
朝食を毎日食べていますか。	94.3 (+0.6) [+0.1]	92.7 (+1.5) [+2.1]
毎日、同じくらいの時刻に起きていますか。	93.0 (+2.0) [+2.4]	93.8 (+1.2) [+0.4]

※数値は(1:当てはまる 2:どちらかといえば当てはまる)と回答した割合(%)、(全国比)[昨年比]

②他者との関わりに満足感をもっている児童生徒が多く、自己肯定感も過去4年間で上昇傾向

質問内容	小学校	中学校
先生は、あなたのいいところを認めてくれていると思いますか。	92.0 (-0.2) [+1.2]	94.9 (+2.7) [+2.1]
人が困っているときは、進んで助けていますか。	93.8 (+0.1) [-0.8]	93.1 (+2.2) [+1.6]
いじめはどんな理由があってもいけないことだと思いますか。	97.4 (+0.2) [+0.6]	97.4 (+1.5) [+1.0]
人の役に立つ人間になりたいと思いますか。	94.1 (-2.3) [+1.8]	96.5 (-0.1) [+2.5]
友達関係に満足していますか。	92.1 (+0.4) [-0.8]	92.8 (+1.4) [+1.6]
授業や学校生活では、友達や周りの人の考えを大切にして、お互いに協力しながら課題の解決に取り組んでいますか。	91.0 (-0.9) [-1.8]	92.5 (+0.6) [+1.3]

※数値は(1:当てはまる 2:どちらかといえば当てはまる)と回答した割合(%)、(全国比)[昨年比]

<自己肯定感4年間の経年変化>

「自分にはよいところがあると思いますか。」の質問に対して、肯定的に回答した割合は、小学校中学校ともに、過去4年間で上昇傾向でした。

自己肯定感4年間の経年変化									
小学校	R4	R5	R6	R7	中学校	R4	R5	R6	R7
自分には、よいところがあると思いますか。	75.7	83.7	83.4	86.1	自分には、よいところがあると思いますか。	80.1	81.8	82.0	85.6

※数値は(1:当てはまる 2:どちらかといえば当てはまる)と回答した割合(%)

ほぼ同じ集団とみなせる、令和4年度の小学6年生と令和7年度の中学3年生では、10ポイント近くの上昇がみられました。先生との温かい関わりのもと、「笑顔の“もと”」を育む取組を行うことを通して、自己肯定感を高め、良好な人間関係を築くことができていると考えられます。

③地域の方と関わっている児童生徒の割合が令和4年度より上昇

質問内容	小学校	中学校
地域の大人に、授業や放課後などで勉強やスポーツ、体験活動に関わってもらったり、一緒に遊んでもらったりすることがありますか。	41.9 (+2.5) [+11.1]	36.0 (+6.5) [+8.1]

※数値は(1:よくある 2:ときどきある)と回答した割合(%)、(全国比)[令和4年度比、令和5、6年度は該当質問なし]

地域の方と関わっている児童生徒の割合が令和4年度と比較すると大きく伸びています。これは、地域行事や地域スポーツの活性化や、各校がコミュニティ・スクールを進めている成果であると考えます。

④読書好きの児童生徒が全国比に対し高い反面、国語の授業への興味・関心は減少

質問内容	小学校	中学校
学校の授業時間以外に、普段1日当たりどれくらいの時間、読書を読みますか。(1:2時間以上 2:1~2時間)	16.5 (+1.3) [R6 無]	13.4 (+3.8) [R6 無]
読書は好きですか。 (1:当てはまる 2:どちらかといえば当てはまる)	72.9 (+3.2) [R6 無]	64.8 (+3.2) [R6 無]
国語の勉強は得意ですか。 (1:当てはまる 2:どちらかといえば当てはまる)	55.0 (-6.4) [R6 無]	44.2 (-7.2) [R6 無]
国語の勉強は好きですか。 (1:当てはまる 2:どちらかといえば当てはまる)	52.8 (-5.5) [-1.5]	48.6 (-9.3) [-14.1]

※数値の単位は%、(全国比)[昨年比]

読書好きの児童生徒が多く、各校の図書館教育、読書指導の成果が表れています。半面、「国語の勉強が得意である」「好きである」と答えている児童生徒が減少していることから、子どもの興味・関心・意欲を引き出すような国語の授業を改善、工夫していく必要があると思われまます。

⑤ICT機器の活用頻度は昨年度より上昇

質問内容	小学校	中学校
5年生までに(1・2年生に)受けた授業で、PC・タブレットなどのICT機器をどの程度使用しましたか。	60.3 (-11.4) [+17.4]	82.6 (+6.1) [+33.2]

※数値は、週3回以上と回答した割合(%)、(全国比)[昨年比]

ICT機器の活用については、昨年度の可児市の結果に比べ大幅に上昇しました。今年度の端末更新により、端末の性能や通信について改善されました。今後も、より効果的な活用を進めます。

(3) 児童生徒質問と教科のクロス集計より

児童生徒質問調査と教科に関する調査のクロス集計より以下の2点の傾向がみられました。

①対話的な学びを通して、学びを深めている児童生徒ほど、学力調査の平均正答率は高い

対話的な学びの良さを実感している児童生徒ほど、学力調査の平均正答率は高い結果でした。対話を生み出す、「協働的な学び」は学習理解を図る上で大切であることが分かります。

②情報活用能力に自信をもっている児童生徒ほど、学力調査の平均正答率は高い

情報活用能力は、学習の基盤となる重要な資質・能力の1つとされています。学力調査の結果を分析したところ、情報活用能力に自信をもつ児童生徒ほど、平均正答率が高い傾向が見られました。日々の授業でICT機器を適宜活用することを繰り返すことで、子どもたちはICT機器を文房具のように自然に使いこなし、結果として情報活用能力の向上につながると考えます。

3 全国学力・学習状況調査の活用について

- ・本調査において、正答率が低い問題については、市全体で課題を共有し、全職員の共通理解を図ります。
- ・各小中学校においては、子供たちの「笑顔の“もと”」(=資質・能力、心情)を育む「主体的・対話的で深い学び」が授業の中で行われるよう、全国学力・学習状況調査の結果を踏まえ、ICT機器を効果的に活用した、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させていく授業改善を図っていきます。